歴史館まなび隊

2

鎌倉時代の善光寺門前

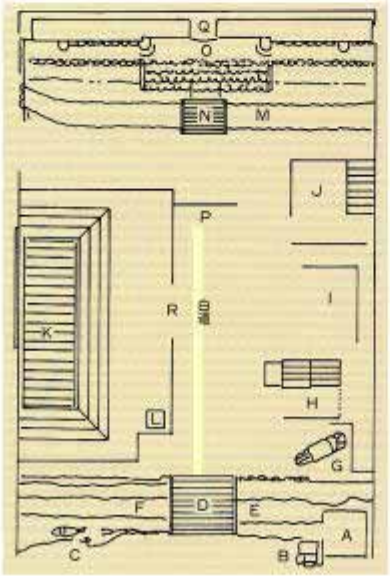
ここでは、いまから７００年以上前の鎌倉時代の善光寺のようすを再現しています。

善光寺は信濃国だけでなく、全国からたくさんの人たちが集まる「三国一の霊場」といわれていました。善光寺の本尊は「阿弥陀如来」といいます。阿弥陀如来は、亡くなった人びとを極楽へ呼んでくださいます。この善光寺の仏さまこそ、日本に最初にやってきた阿弥陀如来と信じられていました。もっとも、この仏さまは決してだれも見ることのできない「秘仏」です。私たちは７年に一度におこなわれる御開帳で、この本尊をまねて造られた「前立本尊」でその姿をしのぶことができます。この善光寺の本尊をまねて全国各地で「善光寺仏」が造られ、善光寺ブームとなります。

鎌倉時代は低温の年が続き度々飢饉が起きました。飢饉が起こると人びとは争いを起こしがちです。病もはやります。そのようななか、現世に期待が持てなくなった人びとは阿弥陀如来にすがり、死後の幸せを祈ったのでしょう。

鎌倉時代のようすをえがいた『一遍聖絵』という絵巻物をみると、当時の善光寺にあつまる人たちのようすが描かれています。これを参考にして再現したのがこの展示コーナーです。

図　善光寺門前のたてもの



説明

Ａ：善光寺の復原模型

Ｂ：パソコンでしらべてみよう。「古代中世の信濃」。

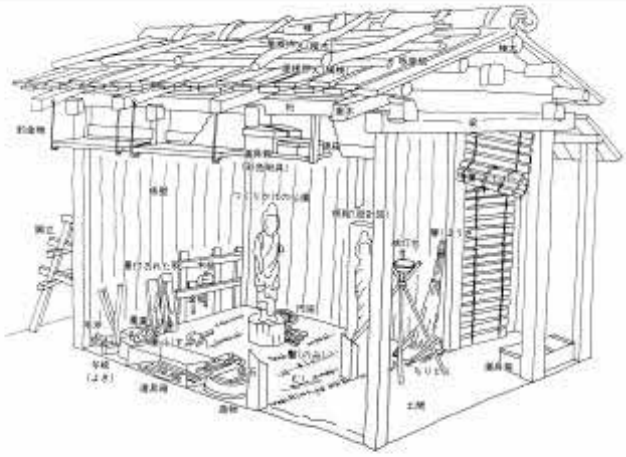
Ｃ：亡くなった人をとむらう塔です。

Ｄ・Ｅ：裾花川と木の橋

Ｆ：地獄絵図がうかびあがります。

日がしずむ夕方どきは、なにかふしぎな感覚におそわれます。浄土への道「白道」はあなたには見えますか？

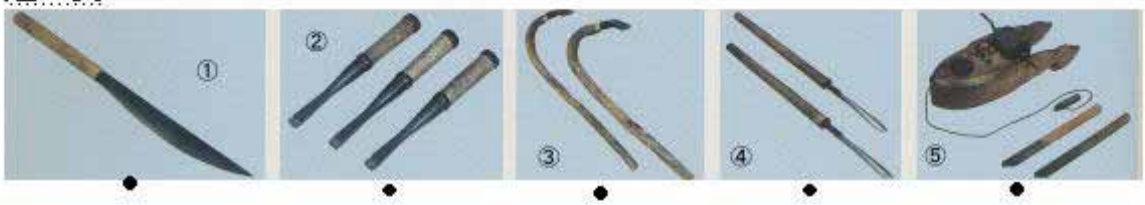
Ｇ：馬にのった武士も善光寺の入口では馬からおりなければいけません。



ここは善光寺門前にすんでいた妙海という仏師の家です。彼のつくった仏像は現在県内に９体のこっています。辰野町には「元亨三(1323)年」作の十一面観音があります。仏さまの体内には彼の名前や年号がかかれていました。

ここは仏像づくりの職人のいる仏師屋です。道具と使いみちを線で結んでみましょう。

道具



a 槍がんな
板の表面を仕上げる道具

b 箭（や）
板を作るために木の木目にくさびを入れる道具

c 墨つぼ
柱などの木に長い直線を引く道具

d のこぎり
木の葉形をした横びき専用の道具

e 手斧（ちょうな）
板の表面を荒削りする道具

使いみち

（ヒント：ブックレット『信濃の歴史と風土⑩　住－たてる・すむ・くらす－』P.15をみてね）

Ｈ：「たな店」には、わらじなどのはき物、クルミ・ほし柿など日常品をうっています。
Ｉ：「町屋在家」は定期市です。月に３回開かれます。各地の特産物がうられています。
Ｋ：「寺庵」はお坊さんのすまいです。ここで生活しながらお経をうつしたりしています。のき下をみると、お椀やなべがあります。これは、当時、すまいを持たず各地をまわっていた職人や聖（移動するお坊さん）のものです。
Ｌ：五輪塔は石を五段にかさねた墓です。みなさんの家のちかくにもあるかもしれません。
Ｍ・Ｎ：鐘鋳川と木橋。Ｏ：仁王像と南大門。
Ｐ：「二十五菩薩来迎図」阿弥陀さまがなくなった人をおむかえにきています。
Ｑ：正面はご本尊です。「善光寺如来縁起」から拡大しました。
Ｒ：勧請つり　注連縄でつるして門内に災いがはいらないようにするお守りです。